

「近松の名作あれこれ」 機会があればぜひ見たい作品紹介

『丹波与作待夜のこむろぶし』は、生き別れた親子の再会場面が、『恋女房染分手綱』という作品の十段目「重の井子別れ」に改作され有名です。

『堀川波鼓』『大経師昔暦』『鍵の権三重帷子』は、俗に三大姦通劇と呼ばれます。近松はこれらの不倫を決して興味本位で描いておらず、偶然の重なりにより、主人公たちが追い詰められていく過程を冷静に見つめています。

歌舞伎では、平成十年、近松座によって二百九十六年ぶりに復活上演された『けいせい壬生大念仏』が傑作とされています。遊女におぼれて落ちぶれた若殿の「やつし」、一人芝居による長ぜりふなど、元禄時代の上方歌舞伎の集大成ともいえる超大作です。